

Newsletter

MAY 2002

<http://www.aack.or.jp>

目次

●特集 AACCKのゆく道	松林 公蔵……………1
A8 AACCKの哲学	中島 道郎……………2
A9 社団法人AACCKと笹ヶ峰会	伊藤 一……………3
A10 ああしんど余計なことを	平井 一正……………5
A11 AACZとAACCK	前田 栄三……………6
●臨時特集 急逝岩瀬時郎氏	
『通える夢』か『幻』か！	吉野 照道……………8
現役時代の岩瀬と私	木村 雅昭……………11
岩瀬さんの思い出	岩瀬 時郎……………15
「通える夢は崑崙の」	伊藤 寿男……………13
岩瀬時郎君を偲ぶ	
遺作品『川を走る』と著者略歴	
●ビデオ批判にコメント	平井 一正……………19
●会員動向	
●編集後記	……………20

【特集】AACCKのゆく道

A8 AACCKの哲学
松林 公蔵(医 一九七七卒)

AACCKの創設目的が「ヒマラヤ未踏峰の初登頂」にあるとすれば、未踏峰がなくなってきた今後、AACCKは何をめざすのか、といった問題に逢着します。「AACCKのこれから歩むべき道」という北村氏提言の本特集は、この点についての会員の意見をひろくあつめ議論を深めようとする意図と理解しております。

最初に私の結論をのべるならば、川瀬さんが「AACCKの登山哲学とは」でかかれていますように、「知的冒険をめざす山仲間の集団」にAACCKのアイデンティティーをおく立場に深く賛同するものです。すなわち、「AACCKとは、京大式の山登りを通じて、新たな知的領域を切り拓くことに情熱をもつ山仲間集団」ととらえますと、今後の展望が開かれるように思います。

ある組織の設置目的概念は、その組織が存在する自然環境と社会状況の変化によって柔軟に変更してゆくのが妥当と思います。AACCK会員

の平均年齢は徐々に高齢化しておりますが、この原因をともしれば若い人が入会しないという問題点ばかりに帰着させる論が少なくありませんが、社会の高齢化は日本全体の構造的な問題でもあります。

ついこの半世紀前まで、人類は社会全体としては、老いを切実な問題とはとらえておりませんでした。二十世紀以前は、世界のすべての文明において、人間の平均寿命は四十歳に満たず、人間というものは特殊な例外を除いて、五十歳から六十歳ぐらいで死ぬものと考えられてきました。年をとり身体が弱って、つえを必要とするような年令になると、やがて、ロウソクの火が消えるように往生するのが、自然の摂理であると受容してきたわけです。従って、社会も、人間は五十歳から六十歳ぐらいで死ぬものであり、六十歳以上の年寄りが増えることはないという前提で組み立てられておりました。五十五歳定年制や、還暦の祝い、厚生年金などに象徴されるように、家族行事、社会・経済制度といった人間の社会的構成原理は、人生ほぼ六十年を前提とした枠組みだったのでした。しかし、いまや先進諸国では、人生七十年あるいは八十年型の社会が出現しはじめております。せいぜい三

世代同居が限界であった従来の家族関係は、四世代同居という新たな局面を体験するでしょう。老人という、本来、ものを生産しない集団の増加は、「勤勉は美德」としてきた、もの中心、生産と効率第一主義の社会の価値観をかえてゆくに違いありません。かつて、生きがい論の主人公であった青年は、その主役の座を、高齢者に譲りわたすようになるかもしれません。

事実、山登りの世界でも、現在、本当に山登りを楽しんでいるのは、若者ではなく熟年者のようです。十年前のシシヤパンマで齋藤Yさんと中島ダンナさんがシシヤパンマ八千メートルに登頂したとき、大きな話題となりましたが、この十年間で六十歳の関門などまたたくまにやぶられ、六千メートルトレッキングとなりますと、八十歳代後半の世代がチャレンジを始めております。たとえ、登山対象が未踏峰でないとしても、AACK熟年会員たちが実践されている山登りは、年齢との挑戦ということだけを考えても、「山を通じた知的冒険」のように老年医学者の私には思われまます。問題は、若い会員に対する魅力をどのようにして獲得するかということかと思われまます。

私は、京大山岳部にはいったおかげで、未踏峰三座の初登頂者となる幸運にめぐまれました。しかし、その初登頂の幸運よりも、京大式山登りを通じて、「新しい知の領域を切り拓く」精神と方法を学んだことのほうが、より幸運でした。医学部でも、高名な教授陣

による名講義が少なくありませんでしたが、大講堂で講席に連なる医学部生にとって学問は受け身になりがちでした。講義を聞き、教科書を調べるといふ医学の勉強はそれなりに興味深くはあったけれども、概念の伝授という域はでなかつたように思われます。問題意識をもつて課題を設定し、ロマンをもつて文献を調べ、チームを組織して実際に踏査し、記録したものを吟味して報告する、そして次なる課題を設定するといった、学問における基本的姿勢は、医学部ではなくむしろ山岳部で徹底的に鍛えられたと思います。何をどうやって研究するかという、研究にとつて基本的性格をかたちづくる枠組みが登山と不即不離の間柄をなす伝統は、京都市の山登りと京大フィールド学派に負うところが大きいと思います。以後、私が、必ずしも既存の医学の領域に還元できない「フィールド医学」という新しい領域をめざしてゆく動機も方向性も、山登りから学んだものでした。高知医大で、医学という狭い窓を通じて、世界のフィールドにでてゆく試みをしましたとき、知的冒険にあこがれた多くの若者が結集してきましました。それは、単科の医科大学であり、医学という共通の地盤があったことも大きいとは思いますが、どのような学問分野でも、フィールドにあこがれをもつ若者は少なくないように思われます。

山岳部現役が、彼等の行きたいところにエクスペディションに出かけたり、あるいは、シニアのフィールドワーカーとともにフィ

ールドにでてその学問的方法を学んだりしながら、併行してそのための訓練を国内山行でおこなう、という構図も可能なような気がします。

その意味で、川瀬さんのいわれるように、初登頂を含めてフィールドワークを通じたパイオニアワークの精神をAACKの哲学とすれば、多くの会員たちの現在の営為も理解できますし、今後の展望も薄明のような気がします。

A9 社団法人AACKと笹ヶ峰会

中島 道郎(医 一九五五卒)

近年の全国的な山岳部の退潮ぶりは言われて久しい。いつぞや、伝統ある同志社大学山岳部もついに存亡の危機に瀕しているとかいう新聞報道があった。この風潮は、わが京大山岳部の存続、ひいては社団法人(以下省略)AACKの存続にかかわる大問題であるが、ここでは議論の範囲をAACKそれ自体に縮めて論じることにする。

山岳部員の減少はやむを得ぬにしても、折角その京都大学『山学部』を卒業しながら、その多くがわが伝統あるAACKに入会しなくなつてきているという。それは一体何故だ。これをどうすれば食い止めることが出来るか、そもそもAACKは存続させるべきか、

といった議論がかなり前から続いている。その一方で、笹ヶ峰会が発足し、独自の名簿を発行して、活発に仲間を募っては山行を繰り返したり、あるいはまた、インターネットを介して毎日のように情報の交換を行なったりしている。笹ヶ峰会はAACKとは一応別組織としていながら、その多くは両方掛持ちで加入している（かく申す筆者もその一人）。この現象は、AACK会員が同時にJACC会員でもあるというのといささか趣を異にする。AACKとJACCとは、会の目的も構成メンバーの背景も違う。それに対し、AACKと笹ヶ峰会は背景が一つなのにその目的なるものが違うらしいのである。そして、掛持ち会員はその目的の違いに応じて、適宜に二つを使い分け、所属を選択しているのだ。そういうあり方もあってよからう。だが一つの組織の中でも、多様な活動はしようと思えば出来るのに、何の不都合があつて、わざわざ二つの組織の使い分けというそんな面倒なことをしているのか？

どうやらそこにAACKの抱えている問題点があるように思われる。笹ヶ峰会の会員は京大山岳部に席を置いた、というだけで会員として扱われる。それに対しAACKの入会には、会員二名以上の推薦を要する、とかいった形式がある。単なる形式に過ぎないが、そういうところが若い人にとっては敷居が高いということになるのかなと想像している。さりとて、私はこの敷居を取り去れ、と言う意見には組したくない。AACKはJACCと

同じく、一朝一夕で作り上げられたものではない歴史を持ち、それ故その会員であることが一つのステータスとなつてゐる。その折角のステータスを理由なく捨て去るのは勿体無い話ではないか。それを、AACK会員として山に登るのは嫌だ、笹ヶ峰会員として登りたいという発想になるのはどうしてだろう。山登りにAACK的あり方と、笹ヶ峰会的あり方が別々にあつても一向に差し支えないが、だから別組織でなければならぬという理屈はない。AACKにおいて、現在笹ヶ峰会が行なつてゐる活動を妨げる理由は何もない。それをわざわざ笹ヶ峰会と名乗つて登山活動をするというのは、AACKは登山をしない登山団体、という既成概念が出来上がつてしまつていて、それに縛られてゐるからではないかと想像する。

みんな、もうそろそろ『幻想的既成概念的権威主義』の呪縛から脱却する時が来たのではなからうか。もともとAACKは自由な発想で未知の山に挑もうとした集りで、そこに権威主義なんか無かつた筈だ。もはや地上に未踏峰は無くなつたといつても、自分にとつての未知の山は無数にある。それを追求することに何の遠慮があらう。AACKはこうあるべきに対し笹ヶ峰会ならこうだといつたような小さなことに拘つてはいけぬ。もっと自由に自分なりの山行を追究することが出来る大きな登山団体として、AACKは伸びて行くべきである。笹ヶ峰会の若い諸君よ、全員こぞつてAACKに入会してこれを併呑

し、AACKにして笹ヶ峰会、にしてしまつたらどうなのだ。

A10

あ(A)あ(A)し(C)んど、
余計(K)なことを

伊藤 一 (工・土木 一九六九年)

●そんなことは、わざわざ文章に書かなくて
も会員はみんな承知している

特定の目的を掲げて成立した不任意集団
(社、財、株など)は、勝手に看板を変更す
ることができない。

牛乳を供給する目的で成立した会社が、同
じおっぱいだからと言って、ヌードスタジオ
を始めるのは、おかしいと多数の人が気付く。
牛乳を供給する目的で成立した会社が、同じ
牛だからと言って、牛肉の販売を始めるのは、
おかしいと気付く人は少ない。しかし、これ
も禁断行為である。

未踏の高峰に登るために集まつた集団の行
動には、二つの選択肢しかない。一つは、未
踏の高峰に登り続けることであり、これは集
団として真つ当な行為である。それ以外には、
集団を解散することが出来るだけである。他
に選べる道はない。絶対に行つてはならない
行為は、集団を存続させるために、目的を変
更することである。「集団の存続」を潜在目
的として、頭在目的を曲げてはならない。

新しい目的の妥当性や魅力の有無は、この際問題とされない。もし素晴らしい目的であれば、別の集団を新規に成立させればよい。

特定の一人は一つの会だけにしか入れない、と定められていない。新規集団に加入するためにAACKを退会したり、AACK自体を解散する必要は無い。つまり、強引に目的を変更すれば、その瞬間からそれはAACKとは無関係な話になってしまう。

会員各位周知のことを、こうして文章にすると、実も蓋もなくなる。事実だからやむを得ない。と、あきらめずに、以下実と蓋の捏造を試みる。

●奢っている頃、平家ほどのような一日を過ごしていたのであろうか

未踏峰の山頂は狭い。AACKの会員が全員並んで記念写真を撮ることはできない。そのためだけではないけれども、実際の登頂者は数人に限られる。その何倍もの人数が下のキャンプで支援しているの言うまでも無い。これらの会員は、登山はしたもの、自ら山頂へは立っていない。が、集団による未踏峰登頂に直接関与したとして、ここまでする狭義の登頂者と呼ぼう。

遠征隊派遣に際しては、人数では、山へ出かけた仲間たちよりもはるかに多数におよぶ会員が、様々な役割でサポートしている。事務手続き、金銭処理、装備、食料……。京都で、必死になって帳簿に取り組んでいる姿は登山者のように見えない。個々の行為は見

かけ上登山と無関係である。しかし、彼らもやはり、集団による未踏峰登頂の中核となる関係者である。こういった会員を中義の登頂者と呼ぼう。

これ以外の全会員が広義の登頂者である。計画に反対するという積極的な参加する人もあれば、何もしないという消極的な形もある。いずれの形態を取るにせよ、その他大勢会員との協力も、計画遂行には不可欠な行為である。役割こそ異なれ、彼らも、未踏峰登頂に強く関与し、支援している。登頂に成功すると、会員の誰も彼もが喜んだ。わが事のように喜んだのではない。わが事だから喜んだのである。全員が登頂したのである。広義の登頂者である。

●山頂（やま）と山頂（やま）の狭間は山行（やま）で充填されている

山頂に立っている時間は短い。アプローチも含めた登攀時間全体でさえ長くはない。初登頂と初登頂の間、会員は手持ち無沙汰ではないのか。何年もの間、何をして時間をつぶしているのであろうか……。愚問である。

中義の登頂者は、登頂時点を遡ること、はるか以前から活動を開始している。文献を漁り、資金繰りを考える、許可申請のために下交渉を始める。もちろん、狭義の登頂者も同時に、事前の活動を始めている。技術の訓練や登山方式・器具の試験のために、低山や既登の高峰を登る。立派な準備行為である。広義の登頂者は、存在自体が主たる活動である

から、入会と同時に次の登頂を目指して活動を開始していることになる。

登頂と登頂の間にも、ぎっしりと登山活動が詰まっている。一年三百六十五日、休む間もなく山行を行っている。頭の中にあるのは、すぐ次の峰だけではない。二つ三つあるいは十回先の遠征をもイメージしている。

対象となる山が具体的に決まっている場合もある。複数の候補があつて、どれから手をつければよいかわからない場合もある。もつと漠然としていて、少数の候補に絞られていないこともある。つまり、次に目指す山が現時点で見つかっていない場合もある。

目標の山が見えていても、見えなくても、AACKの活動に変わりはない。日々山行に励む。これがパイオニアワークである。

●未踏峰（やま）があるから登ると言うだけでは、未踏峰（やま）が無い場合への行動規範が記述されていない

AACKの目的は明確であるが、同時に賢明である。登山頻度についての条件が明記されていない。「毎年一峰を目指す」、「十年に二峰は登頂する」、などと書いていないばかりか、「できるだけ多く」、とも言っていない。実際、創設期に、そのような時間的な条件を設定するのは、自分の首を締めることを意味した。外国へ行くこと自体が簡単でなかった（と話に聞く）戦前には、「何時の日か」、「登れるようになったら」、という以上の規定をすることができなかった。

準備万端整えて、誰かが対象となる未踏峰を見つけてくるのを待てばよい。幸い、いつまでに登らなければいけない、という縛りがない。今日見つからなくてもよい。明日も見つからないかもしれない。それでも、かまわない。いつかは適当な未登峰が見つかる。のんびり待つていけばよい。地球は生きている。一万年ぐらい待てば、地殻変動が起こって、きっと、新しい山ができる。

若者よ、そして老人も（その頃になれば、一万二十歳も一万六十歳も、同い年とみなしてよい）、身体を鍛えておけ、準備を怠るな。登頂の日のために。それが、それだけが、AACZの目的である。

一万年も山行を続けるのには、体力に自信のない会員もいるかもしれない。それはそれでかまわない。もともと、大多数の中義の登頂者は現地へ行かない。国内での作業が主である。広義の登頂者にいたっては、どこに居るかもわからない。対象峰から遠く離れているのが普通である。つまり、登頂時点での各個会員の所在地は、どこでもかまわないのである。日本に居ながらにして、登頂隊に参加できる。いわんや冥土においてをや。

●パンの神様の笛にあわせて、会員はこぞって、飲めや歌え、鳴動せよ

案外早く大山（たいざん）が誕生するかもしれない。

A11 AACZとAACK

平井一正（工・電気 一九五四卒）

一. AACZの紹介

スイスのチューリッヒにAACZ (Akademische Alpen Club Zuerich) というクラブがある。一八九六年に、当時ガイドをつけて登山する風潮に抗して、チューリッヒにある大学の卒業生たちがガイドレス登山の実践と普及と目的として創設したものである。現在でもチューリッヒの大学、ETHの卒業生などが会員である。年齢は二十歳から九十歳までの広がりをもつ。過去に準個人的ではあるが、カンチ（一九三〇）、ペルー（一九五八）、グリーンランド（一九三八、一九六四）、ドーラギリ（一九五三）などに遠征を行っている、しかしミニヤコンガ（一九七一）を最後に特記すべきことはない。現在クラブには岩登りや氷壁登攀のグループが活動している。現在会員数は百人程度。それでも冬はスキー、夏はワンドルグなど種々のツアーの企画など、クラブライフをエンジョイするための活動をしている。

さらに、会員のノルマンド博士からは、AACZが当初めざしたガイドレス登山は、当時は画期的なもので時代を先取りするものであったが、そのパイオニア的伝統は過去のものとなった、今後クラブは、経験あ

る登山家の集まるフォーラムとして、また種々の文献、資料に接することのできる機関として存続するだろう、またアジアや南米などにはまだまだ登る対称があり、氷河、気象、植物、民族、人類学などの専門学者の会員にとっても興味ある対称がある、AACZには新しい活動のための資金があり、会員は新しい活動を企画している、今後ぜひAACZの会員と交流したい、など興味ある内容のコメントをもらった。（AACZ副会長Sam Broderick（三十三歳）、Bruce Normand（三十五歳）、<http://www.physik.uni-augsburg.de/theo3/bnormand/mts.htm>、<http://www.aacz.ethz.ch>参照）

高橋健治さんが一九三〇年のはじめにヨーロッパに留学したとき、このAACZのことを知り、帰国後AACZを作ったであろうことは想像に難くない。ともにパイオニア的の目的をもって設立されたクラブであるが、その目的が達成されたいま、時代の流れとともに会の目標をかえていくのは、自然のながれであり、むしろスマートである。（ちなみに今西さんがAACZを作ったときの理念はヒマラヤ初登頂において、AACZの定款（会則）にはヒマラヤ初登頂を会の目的とするとは書いていない。会の目的は会員の意識の継承であり、時代とともに目的が変わることは仕方ないことである）。

次にAACZの存在意義、問題点などについて私の意見を述べる。

二、AACCKの存在意義

AACCKの目標を「初登頂」のようなはっきりとした目標にしぼることは無理があり、今後はAACCKのようなクラブライフェンジョイ型に移行することは想像に難くない(大勢はいまその方向に動いている)。しかし活動の底流は、あくまでも未知な世界を目指すことにおくべきでありたい。

すなわち会員は「会員の関係する分野でのパイオニアワーク」という共通の認識で結ばれているということではないのか。関連する分野は、学術、登山、探検、その他の仕事などいかなる分野でもいい。AACCKの精神は何も登山だけに反映されてきたのではない。企業でも大学でも活躍している会員の中には、無意識にしろパイオニアワークという精神の糧を武器に、いい仕事をしている人が多い。これは京大という育った土壌にもよるのであるが、体力、精神力が鍛えられる登山を共通の基盤としていることに大きな原因があると思う。

今後会員がいろいろなプロジェクトをすすめるとき、それをバックアップするのが、AACCKの人材であり、蓄積された知の集積であろう。そういうことでAACCKの存在意義がでてくる。

三、問題点

活動の底流は「未知の世界を目指す」と書いた。しかし登山、探検の分野に限って言えば、一番大きい問題は、会員の意識の低調さ

である。もう魅力ある対称は残っていないという話によくきくが、果たしてどれだけ勉強した結果の言であるかは甚だ疑問である。クルト・ディエンベルガーが数年前に探検したシヤクスガム源流地域、一ツ橋OBの中村保さんがいま精力的に探求している東チベット、メコン源流、さらには二〇〇〇年の早稲田大学が初登頂に成功したコンロンのチョンムスタグなど、すべてAACCKが取り組んでもおかしくない企画であったが、会員からはその発想すら生まれてこなかった。チョンムスタグなどAACCKが一度接近を試みた山ではないか。メイリーの後遺症という言い訳もあるかもしれないが、AACCKの集まりの雰囲気からは、前進的な空気は感じられなかった。

要は知識不足で勉強していないから、何が問題か、何がおもしろいかがわからないのである。カンペンチン峰もメイリーもAACCKの中から発想されたものではないことが一つの例証である(カンペンチンは神戸大、メイリーは探検部)。AACCKとは関係ないが、京都に本部のある「横断山脈研究会」という有志の研究会がある。この研究会に出席して会員の活動状況と研究発表をきいていると、AACCKの不勉強さが感じられてならない。(ここでいうAACCKとは私の接している範囲からの類推である。誤解であればよくこんで訂正する)。

若者に夢を持たせるのは、知識経験豊富な中高年会員の役目であるが、その層が勉強不

足で具体的なものを何一つもつていなければ若者はない。しかも若者はいま、同志をみつめるためにクラブを必要としている。ネットワーク(H.P.)で同志を探し情報を交換する時代である。どこからみてもAACCKは若い人をひきつける魅力あるクラブとはどうてい言いがたい。現状のままでは、このまま何ら活動らしい活動をすることもなく、終焉をむかえるのも仕方ないと思う。同じような状況にあるAACCKの生き方も参考にして、AACCKのドラスティックな自己改革が早急に望まれる。

【臨時特集】急逝岩瀬時郎氏

「通える夢」か「幻」か!

—大菩薩嶺山麓にて先輩逝く—

前田 栄三(工・機械 一九六九)

今年の二月五日(火)十七時過ぎ、日本山岳会の会議室に睦好ひよほ君・小林バコヤシ君を招き、岩瀬ご夫妻と私そして学習院WV部OBの川畑直美氏(三井物産OB)が顔を揃えました。私と川畑氏はある山の集いで十年近い親交がありますが、岩瀬夫妻と氏この日が初対面、話題は崑崙計画の検討でした。若手の二人は、高所登山そして崑崙山脈遠征経験のあるご意見番・コーチ役という役回

りです。勿論それだけではありませんが……。その足で、直ぐ近くの官舎に住む松浦コッテさん宅を全員で訪問し更に懇親を深めました。この二次会の企画はもちろんコッテさんのご好意と岩瀬さんのご配慮によるものでした。

二月九日～十日の大菩薩山行は、崑崙への参加の意志を固めた川畑氏と岩瀬さんそして私との間のパーティシッブを醸成する第一歩でした。同月十七日(日)には筑波を訪問して安仁屋さんを交えて検討を加え、二月末から三月初旬にかけては冬テンを担いで岩瀬夫人も一緒に奥日光を歩き、三月には富士山頂でテント泊；等等大菩薩以降のトレーニングのスケジュールも固まりつつありました。

こうして迎えた二月九日(土)、岩瀬・前田・川畑そして川畑氏の大学&会社を通じた友人・高橋清司氏の四人が、七時十六分新宿発特急あずさ九十一号に乗車し塩山に向かいました。車内はガラガラで、岩瀬さんと私は四人がけのボックスを二人で占有し相対して座り、塩山までの間「崑崙」に絡むいろいろな話を交わしました。この間、変わった様子は微塵も感じられませんでした。彼の家は内房の君津にあり遠方なので、前夜は参宮橋にある新日鐵・代々木倶楽部に宿泊していました。前夜の不摂生？飲み過ぎ？私の眼には普段と変わらぬ物静かな様子でしたが……。

塩山到着は八時五十分、予約しておいたタクシーに乗車して登山口到着が九時十八分、パッキングを改め同二十五分に丸川峠に向か

う沢沿いの雪道を川畑・高橋・岩瀬・前田の順にゆつくりと歩き始め、平坦な道を十五分歩いてやおら登りにかかるところで小憩し(九時四十分)、各人ともども上着を脱ぎ身なりを整え、先頭を行く川畑氏の「さあ行こうか」と声がかかったその時、異変を伝える高橋氏の声が上がりました(九時四十五分)。ザックを下ろした順番は、川畑・高橋・岩瀬・(四メートルほど離れて)前田でした。塩山に到着してここまで、だれひとり無駄口をたたく人も無く、とりたてて会話する事も無く、入山時の段取りをいつものように淡々と黙って行っていた……といったところです。

彼のパッキングぶりを(見習うべく)注意して見ていた高橋氏によると、前かがみの状態のまま朽木が倒れる様から地面に落ちたそうです。眼鏡がはずれグラスが二つとも飛んでいました。その前後を含めそれ以降、何らかの声を発したり僅かな表情の変化を見せたり……という生活反応は、残念ながらかなシグナルすら一度も目にする事が出来ませんでした。正に「忽然として逝った」のでした。享年六十一歳。

思わず知らず互いの顔を見合す私達にとつて、登山口まで乗車したタクシートの運転手が「次回、塩山に来られた時のために……」と言って手渡してくれた名刺と川畑氏が所持していた携帯電話が、最大にして最善の手段を提示してくれました。

直ちに川畑氏が運転手と交信し、彼から消防本部へ連絡を入れてもらうと同時に我々も

直接通報すべく行動しました。何といつても我々を下車させたばかりの運転手の通報は、「現場の特定」という点で正確無比であった事は疑う余地もありません。

「頭(脳)の場合には動かしてはいけな……」との思いが強く私の意識にあり、当初大声をかける以外になす術を知らない状態でしたが、脈を取れない(判然としない)状況から意を決して横向きの身体を仰向きにし胸部のマッサージを始め、やがて消防本部の指示で(十時頃から)顎を少し持ち上げ人工呼吸も加えました。人工呼吸は、十時二十五分救急車のサイレンが停止し十時四十八分に救急救命士が現場に到着するまで継続し、その後は救急隊員二人とレスキュー隊員四人の手に処置を委ね、お身体は十一時十二分に現場から(川畑・高橋両氏が付き添い)搬出され同三十分救急車で(川畑氏が付き添って)塩山市民病院に搬入されました。車内では酸素マスクを装着された上、隊員により不断の心臓マッサージが施されたそうです。

岩瀬さんは、日本山岳会の会員証と共にご自身の名刺も所持されていたので、現場からご自宅の奥様に「歩き始めて十五分ほどして倒れられた事、現在消防本部に通報し病院に搬送すべく救急隊員の到着を待っている事」を第一報としてお伝えする事ができました(十時少し前)。奥様は、「病院の診断結果を踏まえて動きたい。第二報を自宅で待ちたい」と述べられ、ご自分は待機すると同時に埼玉

に在住のご長男に連絡して、直ちに彼をして

塩山に向かわせました。

奥様への第二報は、病院側の「直ぐにご家族をお呼びするように」とのご指示をお伝えする形で行いました(十一時五十分)。ご長男の塩山到着は十五時三十分、そこで初めて私から事実のみ簡潔にお知らせしました。奥様の塩山到着は十七時五分、奥様へはご長男から説明され、十七時二十分から同四十五分まで病院側の説明をお二人で受けられました。

死亡推定時刻は病院に搬入される直前即ち救急車で搬送中とのことで、死因は急性心不全と診断されました。この結果、彼の死は事故死の扱いとなりました。

A A C Kへの連絡は、川畑氏の後輩で伊藤寿男先輩の会社の同僚の方(学習院W V部OB会《稜桜会》前副会長)と午後連絡が取れ、その方(小林成光氏)から電話番号をお聞きして、十五時過ぎにご自宅の伊藤さんに連絡する事ができました。

私を含むこの四人は、昨年来、時々顔を会わす間柄だったことが幸いしました。

病院の諸手続きを済ませた奥様とご長男は、(私も付き添い)塩山警察署・東山梨消防本部を訪問してお礼を申し述べましたが、警察署では奥様とご長男の事情聴取にかなりの時間を費やしました。内容は不明です。

十七時、岩瀬さんのご遺体は市民病院の医師・看護婦の皆さんに見送られ、奥様とご長男が付き添われ君津の家に向かわれました。高速道路は渋滞も無く二十三時過ぎ

には到着されたそうです。なお、岩瀬さんの日頃の健康状態・健康診断の状況等につきましては、寄せられた情報を既にドクター会員にお伝えしてありますので、別途有益なコメントをいただけるものと思います。二月九日(土)の朝、塩山に向かう電車の中で差し向かいで和やかに話したことが、岩瀬先輩の最後の発信となりました。全て崑崙に絡んだ話ですが、要点のみお伝えします。

① A A C Kに補助金(助成金)制度があっても良い。対象は六千メートル以上の未踏峰、学術・探検の要素を含め、計画を評価する審査委員会があってもいい。

② 筑波大(安仁屋さん)訪問のねらい。本人の取り込み、保有する共同装備の確認と借用。低圧室の利用、早い時期に利用したらご利益(効果)がなくなる。富士山に行こう、山頂で泊まろう。

③ 総隊長は、伊藤寿男さんにお願しよう。タクラマカンで二週間程度居てもらえれば、本人に確認しないとなあ。

④ 山の装備の話。GPSの使い方、関東東用に冬テン三張り確保した時の理事会の雰囲気。

⑤ コッテさん宅へ竹内ピラさんと岩瀬さんで伺い、夜、ピラさん宅に泊まった時の話。ブータン留学生との関わり、料理に凝ってるお話など。今度、ピラさんのところへ行こう!

⑥ 二、三月初旬の奥日光く光徳小屋の集い

には、(奥さんも)一緒するよ。彼女は五月の雪山も行っているし、山中で一泊しよう、大丈夫。彼女の山の力は相当なものだ、私の足元くらいはあるよ……。

⑦ A A C K関東会お歴々の素晴らしいリーダーシップぶり、人物像のこと等など。

最後になりますが、地元の関係諸機関・タクシー運転手の皆様方に心からお礼を申し上げると共に、現場での連絡と通報・的確な助言そしてマッサージに大変なご尽力をいただいた同行の川畑氏、高橋氏に対し、深甚の謝意を申し上げます。

不幸なことから、森本グロン君の時に「Newsletter」に寄せられた同行諸氏の報告内容が、とっさの場合の大いなる行動指針となりました。

このことを一言申し添え、私の報告を終わります。

合掌

現役時代の岩瀬と私

吉野 照道(農・農生 一九六六)

岩瀬は昭和三十五年山岳部に入部した。同期には栗田ラーメン、阪本グド、水瀬サウド、安岡ヤス、杉山スリコ、小原バカチ、杉野シメチョー、山本テカリ、根本コンチヤンと私、吉野コッペがいた。奇しくも、

岩瀬が西高、水瀬が成蹊高、私が九段高と、三人が東京出身で、ともに探検大学京都に惹かれてきたのだった。

私たちは宇治分校最後の学年であり、初めての顔合わせは、三回生の新人係(大森ゲジ氏だったように思うが・・・?)が宇治に来ての入部説明会だった。囲碁部と隣り合った小さな山岳部宇治分室が私たちの根城となった。とはいっても、まだとても、のちの北白川気狂い部落などを予測できる雰囲気はなく、皆大学での新生活にまじめに取り組み、授業もさぼらなかつた。毎日昼休みと放課後に部室に集まり、山の歌の歌詞を覚えたり、トレイニングに精を出した。毎週水曜日には宇治電に乗って山岳部の水曜会に出かけていくのが無上の楽しみ、という純真な山岳部生活を始めた。初めての山行は北山への新人歓迎山行で、北山荘での酒盛りの上級生の荒くれぶりには度肝を抜かれるくらい、それはそれは可愛い青年たちだった。

ほとんど毎日顔を合わせて山行計画を練ったり、覚え立ての酒を手にいっぱしの飲み助顔をしてヒマラヤへの夢を語ったり、まだ憧れ段階のメッチェンを談じたりするうち、皆段々にそれぞれの個性を発揮しだした。このころの岩瀬については、正直なところ、「ものすごくそまじめな男」という雰囲気があった。だが時にひどく情熱的になり、とくにヒマラヤに行きたいという話になると、それが際だっていた。夏山、

秋山、笹ヶ峰スキー合宿と進む頃には、岩瀬のガンバリ屋ぶりは皆の認めるところとなっていた。彼はまた皆が議論している中では、なかなか口を開かないが、やがてもむろにゆっくりとした口調で、少し唇の先だけをとがらしながら、まったく正統的な意見を述べるのだった。

岩瀬と私はむきになって競争していた時期があった。二人とも岩登りが好きで、金比羅のゲレンデでは難しいルートと登る時間を競い合ったし、腕立て伏せを何回するかまで競争であった。岩のほうは私に分があつたと思うし、腕相撲も最初は私が勝っていたが、いつの間にか全く歯が立たなくなっていた。ただいまだに合点がいかないことがある。最初に挙げたように、私たちは皆あだ名を持っている。久しぶりに勤め先に電話したり、会いに行ったりしたときに、受付であだ名は出てくるが、本名が出ないなどという困った事態を経験した人も多いはずだ。あだ名が第二の人格になるほど、それほど山岳部とあだ名はつきものなのに、どういうわけか彼だけにはどうとう最後まであだ名がつかなかったことである。私たちも仲間に対してそんな不公平な扱いはすべきでない、皆でいろいろ努力したのだったが、結局イワセのままだった。そのうちイワセが本名を乗っ取って、彼のあだ名になったのだと私は解釈している。彼自身もそういう気になつていたのでなからうか?そう考えなければ、負けず嫌いの努

力家であつた彼が文句も言わずに、「イワセ」と呼ばれたら「おー」と応じていたはずはない、などと思うのだが。

AACKが長年計画していたサルトロカシリが実現に向け動き出した。山岳部でもヒマラヤ研究会での勉強を続けていたが、もつとも熱心だったのは私たちの学年、中でも岩瀬だった。彼と水瀬、私の三人で深田久弥氏を訪ねて、意気軒昂、「三人とも必ずヒマラヤに行きます」と誓ったりした。これはのちにほとんど実現できた。南極研究会も地道な活動を続けていたが、このほうはむしろ一年下の学年の方がアクティブで、どちらかといえば将来の実現目標としての色合いが強かつたように思う。

サルトロクの初登頂成功の知らせにわきたつ中で、私たちも初の現役学生主体の遠征隊の目標を、パンジャブヒマラヤの六千メートル級未踏峰であるインドラサンに定め、インド政府の許可を得ることが出来た。

水曜会で、私たちの学年の活動も評価されて、隊員の一名が割り当てられた。ある夜、全員が吉田山に集まり、隊員を決めることになった。立候補意志の有無を一人ずつきいていった。岩瀬はもちろんはつきりと強い意志を述べた。全員で彼を推薦することになった。彼なら上級生に劣ることなく、力を発揮してくれるだろうことを私たちは信じた。私自身は、もちろんヒマラヤは山岳部に入った最大の目標であつたが、自分にはまだ日本の山ですべき事がある

と思つていたので、立候補はしなかった。

インドラサン初登頂の嬉しい報告がルームに届いた。私たちは、現役の力もヒマラヤに通じるのだと、次の目標に向かうべく、国内山行に精進することとなった。私たちは三回生となり、山岳部活動の中心を担う世代だった。当時の山岳部は実動部員五十名を超え、年間の山行数も多分六十以上あつて、内容・実力ともに全国の大学山岳部中の筆頭であつたと自負している。私は部のリーダーに推され、岩瀬と水瀬がサブリーダーとなつた。責任の重さを感じていた。十一月初の雪山に向かうパーティーを出す前、かなり紛糾した水曜会での山行決定会議の後、私は皆に、初登頂におごることなくくれぐれもコンプリートな山行をしてくれと強くいつた覚えがある。

しかし、二回生の加納セイハクが滝谷に転落して行方不明となつた。結局翌年五月まで、私たちは遺体捜索に釘付けとなつた。彼の葬儀の後、山岳部はふぬけ状態だつたといつてよい。この間には、探検部、インドネシアとの合同遠征である、当時のスカルノ峰（カールステンツ・トップ）遠征隊に、水瀬、松田ランブの二名を送つたものの、インドラサンの隊員には初登頂の喜びに水を差す形となり、本当に申し訳なかつたと今でも思つている。

この頃、私はよく岩瀬の下宿に押しかけて、酒を飲んだ。何を話していたか今でははっきりしないが、山で死ぬことについて

など、あまり威勢のよいものではなかつたことと思う。翌日昼頃に目が覚めると、大體彼はもう学校に行つていて、私は悄然としつつ外にさまよい出て、（えらいやつちゃなア、岩瀬は・・・）などと考えながらも、学業には打ち込めなかつた。それに比べ（結婚式のスピーチではないが）彼はとてもよく勉強していた。私は彼の大事な勉強時間をずいぶん横暴に横取りしたものと、あとで反省した。

岩瀬はその勤勉さとまじめな努力により、首尾よく卒業して就職した。

私は大学院をほかして留年し、ヒマラヤ行きをもくろんだ。一年以上級でインドラサン隊員だつた宮木トク氏と行く計画だつたが、彼も就職が決まつた。結局私一人で行くことにしたが、一時は下級生から「遭難時のリーダーがヒマラヤなんて」などといわれ、「山岳部をやめて行く」と宣言したりしたが、最終的にはガネッシュの初登頂に参加することが出来た。私は卒業後はブータンにもヤルンカンにも行かせてもらえなし、その後もネパール、ブータン、東南アジア、雲南にも度々行つて仕事をしている。もつとも山登りはとくに廃業して、かわりに熱中したヨットにも最近は乗る機会がないザマである。今この原稿を書いているのも西表での仕事の合間で、帰つて二日後にはベトナム行きである。このところ毎年の年賀状やニュースレターで、AACK諸兄が盛んに海外の山に出かけているのを聞

いては、「みんなえらいなア」と感心ばかりしていた。（でもおれはまだサトイモでやるべきことがあるし、山も酒もヨットも普通の人間の何人分かはやつたからなア）とひとりごちつ、今年の年賀状で、岩瀬がコンロンの未踏峰に行く予定であるのを知つて、「あいつ、ガンにも勝つたんか、えらいやつちゃなア」とまたもや脱帽していた矢先の計報であつた。

思い返してみれば、滝谷遭難以来、山岳部の仲間がいかにかくさん去つていつてしまったことか！機上から見た輝くばかりのヤルンカン、憎らしいくらい美しく切り立った梅里雪山にもランブやジローの面影、多くの仲間の顔ばかりが浮かんた。

私が山をやめる決心をしたのは、ヤルンカン報告書の編集をしている頃だつたように思う。そろそろ自分の人生の目標を定め、サトイモの系統進化研究の筋道を立てなければならぬと思つたから。というのはええかつこしすぎで、それはそれで本當のだが、わしみみたいな登り方をしていたらきつと死ぬな、と思つたことが大きかつた。しかしその後もパツとせすの暗中模索が続いた。そして山岳部時代から興味があつたヨットにのめりこみ、またもや学業放棄状態、八千メートルからゼロメートルへ、どうしようもないバカ。しかも山仲間諸兄はおそらく全然知らないこともやつて、山よりも怖い海の美しさの一部を知ることが出来た。ただ、まだ海をやめようとは思つて

いない。今は中休みだと思っっている。もう一度氷河の山に登ろう、と思つた岩瀬の氣持ちを推し量るのは僭越だが、彼は本當にもう一度、氷河を踏んでキラキラする空氣の中を登りたかつたのだろうな。

彼のことだ、先に着いていた仲間に向かつて、「あそこにあんなに高くてきれいな山があるやんけ、登りに行こうや」などと、不埒にも天国の初登頂をけしかけているのだろうと思つて、彼の冥福を祈る代わりとしたい。

岩瀬さんの想い出

木村 雅昭（法 一九六六）

私が京大山岳部に入つたのは昭和三十六年であるが、その当時京大山岳部は一つの黄金時代を迎えていた。春の黒部中流での合宿から十字峡横断へと、矢継ぎ早に大きな山行が企画され、そしてそれは三十七年春の剣西面合宿へと結実した。それはまことに壮大な計画であつた。まず前半はガンドウ尾根、北仙人尾根、北方稜線、奥大日を経て前剣という四本のルートから剣岳に集中登山して馬場島に集結し、後半は馬場島を拠点として剣尾根の完登を目指すというものである。当時一回生であつた私は北仙人尾根のパーティーに入れてもらつたが、

天候が悪く深いラッセルと吹雪に悩まされ、ようやくのことで剣の頂上へと辿りついた。このような苦しい山行は後にも先にも経験した事がない。とりわけ空腹と深い雪は今でも鮮明に覚えている。後半は、お前達一回生は足手まといだと、毛勝に追いやられ、はるか彼方から剣尾根をのぞみ、先輩達の壮途の成功を祈つていた。剣尾根はまことに圧倒的な迫力で私たちを威圧し、それだけにその成功はルーム全体に大きな自信と喜びを与えた。

こうしたルームの力がヒマラヤにむけられることとなつたのは、ある意味では自然なことであつた。学生だけのヒマラヤ遠征は、それまでなされたことがなく、その意味でもインドラサンの遠征は、パイオニア・ワークをモットーとしていた我が山岳部にまことにふさわしい壮挙であつた。岩瀬さんは三回生の中からただ一人選ばれた隊員だつた。外貨が厳しく管理されていて、日本を脱出するだけでも困難であつたこの時代、ヒマラヤは、誰にとつても憧れの的で、希望者が殺到した。そのなかから岩瀬さんが選ばれたということは、いかに彼が実力と人望を兼ね備えていたかを物語っている。この時の隊員選考は同級生によつて吉田山の上で夜を徹して行われたという。なにが話されたかは知らないが、なんともフェアでロマンチックな選考会だと思つた。このような岩瀬さんは、一年下の私たちにとつて憧れの的であつた。残念ながら岩

瀬さんと山行を共にしたのは一回きりだったが、しかし「下界」ではよく付き合っていた。當時はナイロン・ザイルではなく麻のザイルを無雪期には使用していた。春ともなれば岩登りシーズンに備えて、袋の中からザイルを何本も取りだしてピンと張り、それに亜麻仁油を塗りつつしごいて五月以降の岩登りに備える。それは我々若者を一気に剣や穂高の岩場へと誘つてゆく、お祭りのような雰囲気兼ね備えた年中行事だつた。

そうした作業を終えたある日、岩瀬さんの下宿に転がり込むこととなつた。当時酒は未だ貴重品であつたから、酒を奢つてもらつた否か定かでない。しかし山田二郎のヒマルチュリ遠征記を取り出して話してもらつたことは、今でも鮮明に覚えている。書物が手元にないので正確な記述は再現できないが、そこには「合理主義は安易主義に通じる」という山田二郎氏の言葉が書かれていた。それを前に岩瀬さんは当時の山岳部の風潮をかなり激しく批判された。この時代の山岳部は一種の野武士集団みたいな雰囲気を持つており、ずいぶんと無茶なことをやつたが、しかし登山のやり方は合理主義をモットーとしており、いわゆるガンバリズムとは無縁であつた。別に科学的登山をモットーにかかげていたわけではないが、この時代の大学山岳部に横行していたシゴキなるものに対しては、はつきりと一線を画していた。むろん岩瀬さんもシゴ

キには反対であったが、われわれの内なる「合理主義」に危険を感じておられたのである。

岩瀬さんはいつもよれよれのズボンをはき、およそ服装には無頓着な人で、彼の周囲にはすべてを山に捧げるストイシズムがただよっていた。私が三回生のとき、冬山シーズンを控えて、岩瀬さんは剣の北方稜線の計画を立案しておられた。北方稜線は、春には京大山岳部を含めて既に複数のパーティーによって踏破されていたが、厳冬期はまだ誰もやったことがない。いわば日本に残された最後の課題とも言うべきものだった。

当然ルームでは慎重論があいついだが、岩瀬さんの決心は固い。そこで北方稜線に行きたいものだけでより詳しく検討しようということ、やる気のあるものは、当時西部構内にあった池の周りに集まれということとなった。私もそれに参加したが、内心恐怖感を抱いていたことは事実である。しかしここでたじろいでは男がすたる、というわけで参加した。岩瀬さんは「色々問題が残っているが、われわれは同志的結合でそれを克服しよう。これからは我々は生死をともにしよう」といわれ、一人一人の決心を改めて尋ねられた。とたんに私自身の恐怖心が頭をもたげてきたが、いままらどうすることもできない。ひよっとして死ぬかもしれないが今引いたら一生恥を晒すことになるのではないか。ここはやるしかない

とぐつと下腹に力を入れ、「わたしもやります」とかろうじて言うことができた。

この計画は結局日の目を見ることなくあった。その原因はすっかり失念してしまつたが、失念したこと自体私自身の決心のあやふやさをなによりも物語っているであろう。その冬は結局、燕岳から東鎌尾根を経て槍が岳へという平凡なものに終つてしまつたが、今にして想えばそこら当りが登山家としての私の分にあつたのであろう。

岩瀬さんと山に行つたのは先に述べたように、三回生の六月の一回きりである。その前年の十一月に私たちの同級生、加納洋君が滝谷で滑落死し、その遺体の搜索のためである。ヤルンカンで死んだ松田君もメンバーであつたが、すでに梅雨に入つており、涸沢でテントを張つたものの、強風と豪雨でテントはたちまち水浸し、全員ぐつしよりと濡れてしまった。悪天候は翌日も続き、惨めな気分になつたが、ここで小屋にでも入ろうと言おうものなら、「合理主義は安易主義に通ずる」と軽蔑されそうである。我慢して二晩目にまでこぎ付けたが、涸沢小屋の明かりがなんとも誘惑的である。そこで勇をこして、たしか松田君が小屋に入ろうといつたのを合図に、岩瀬さんの荷物もウムをいわせず纏め上げ、小屋に転がり込むこととなった。

その翌日は好天に恵まれ、北穂小屋に入り、次ぎの日には滝谷に入った。加納君が滑落したと想われるC沢を上部からくまな

く搜索するうちに、沢のうんと下部でかれの遺体を発見した。我々は定期的に滝谷をパトロールしていたが、融雪のスビードもはやい。遺体はすっかり露出しており、遺体のいたみもひどかつた。岩瀬さんは黙々と収容の指示を与え、加納君の遺体に対しても優しく語りかけておられた。私など気も動転しており、とてもそんな余裕がなかつたが、岩瀬さんの姿は感動的なものであつた。

「合理主義は安易主義に通じる」という言葉とは裏腹に現実の岩瀬さんは、実に優しい人だった。その眼差しにはいつも笑みがたたえられており、その瞳に接すると不思議に気分が落ち着いた。また岩瀬さんの学年はとりわけ強い団結力を誇つており、栗田さんの家を中心にも仲間が集まつていたが、そうした集まりに対して一步距離を置いておられたのも印象的だった。それはおそらく岩瀬さんのストイシズムのしからしめるところと思われるが、あるいは彼の天性のものかもしれない。私はといえば、岩瀬さんの忠告にもかかわらず、合理主義昂じて安易主義を文字どおり実行していたように思われる。とにかく岩瀬さんと私は、山に対する打ち込み方に質的な差があつた。お互い学生時代にはヒマラヤに登る幸運にめぐまれたものの、卒業後は遠征から遠ざかつてしまった。それでも岩瀬さんは会社の山岳部を組織し、せっせと山に通つておられたとうかがっている。それに対

して私など、二十代の後半に本格的な登山をあきらめてしまい、遠征に關係するのも募金集めにかぎられてしまった。その岩瀬さんが、久しぶりに企画された崑崙への遠征のためのトレーニングに入った山で命を落とされたという。こう述べては遺族の方々に失礼かも知れませんが、それはまことに岩瀬さんにふさわしい死に場所と思えてならなかった。

「通える夢は崑崙の」

岩瀬時郎君を偲ぶ

伊藤 寿男（経 一九六三）

二月九日、連休の初日、午後四時前、のんびりと本を読んでいると電話が鳴った。崑崙遠征トレーニングで大菩薩に登っているはずの前田オヤマからであった。「悲しい知らせです。岩瀬さんが登山口でお亡くなりになりました。」暫時絶句した。本当か岩瀬、一体どうしたのだ岩瀬、三日前に電話で話したばかりではないか。崑崙の行動日程表を作ってみましたと喜々としてファックスしてくれたばかりではないか……。今年には彼にとつて崑崙遠征の年、最も輝く年のはずであった。それが突然逝ってしまった。ともに崑崙の未踏峰を計画した一人としてここに追悼の文を献じたい。

彼とは一つ違い。思い浮かべると山岳部時代からの四十有余年、濃淡はあったが長い付き合いであった。

学生時代の彼については他の仲間たちが書くであろうからあまり触れない。彼の初めて冬山を彼と一緒に登ったのがいい思い出として残っている。北鎌尾根から北穂まで縦走した。厳冬の北鎌尾根を末端から忠実に辿ったのは当時としてはかなり難易度の高い山行であった。彼はこの冬山で鍛えられ、次の春山で自信をつけ、夏山で存分に活躍して、インドラサン最年少遠征隊員に選ばれていったのである。

社会人になってからは、岩瀬は新日鉄の光工場勤務となり、光工場の人たちと山に登っていたようだ。数年後に東京に戻ってきて、また岩瀬との山の付き合いが始まった。光の山の連中が饒別にくれたのですよと、当時としては高価なスベアの小型コンロで料理を作ってくれた。誰からも好かれ、いい仲間達といい山登りをしていたのである。

東京では、岩瀬はAACK関東会の世話役として働いてくれて今日にいたった。彼のおかげで新年会は新日鉄の代々木倶楽部で行うことが定着した。AACK関東会が今日までこれほど親密な関係を維持しているのは彼に負うところ大である。

当時新日鉄の彼の属する部で「走遊会」と称する走る会があった。部員達が休日に走ってきては地図上のシルクロードに沿っ

てその距離を赤線で書き込みローマを目指すと言うユニークな会である。この会が利根川を河口から源流まで走るのだと言う。毎週部員達が少しずつ走ってついに水上の奥の八木沢ダムに達した。ここから先は滝あり、淵あり、へつりありでザイルも必要となる。走友会の人たちは手が出ないので私がピンチヒッターで引つ張り出された。岩瀬と走遊会の山のベテランの林氏と三人で利根川の源流を四日かけて遡った。水源の大水上山直下の最後の詰めで、滴下する利根川源流の雫を水筒に受けながら、これを皆に飲んでもらうんだと顔をほころばせていた岩瀬が忘れられない。帰京後の利根川完走打ち上げパーティに私も呼んでもらった。皆で岩瀬の汲んできた源流の水を一口ずつ飲んでいった。非常に雰囲気の良い部のなかで、岩瀬はヒーローであったが、例の通り奮らず高ぶらず皆に愛されて幸せそうであった。

八年前に私が腎臓癌で腹を切り、その一年半後に岩瀬が胃癌で胃を半分切つてからは二人一緒の山行はなくなった。再開したのは一昨年（二〇〇〇年）夏、沖津キヨンさんと三人で新装なった笹ヶ峰ヒュッテから天狗、金山に登った時である。天狗つ原で猛烈な雷雨に遭いほうほうの態で駆け下つたのだが、このときに私は岩瀬の体が完全に元に戻つたのを確信した。実はこの二年前の夏（一九九八年九月）旧笹ヶ峰ヒュッテを建て替える前に最後の別れを惜しむ

べく「笹ヶ峰会」がヒュッテで催された。長野駅で岩瀬と合流してヒュッテに向かったのであるが、久し振りに会う岩瀬は病み上がりで痩せており且つ酔っ払っていたせいか、あの精悍な岩瀬の面影はなく、これでは当分山には登れないなどの印象を持っていたからである。

ところが二年後（二〇〇〇年）の天狗、金山登山で彼は見事に昔の岩瀬に復帰していた。この時は岩瀬と二人、横浜・ヒュッテ間をマイカーで往復した。道中、車の中で二人は自分の思いのたけを喋りまくった。私は死ぬまでに、低くても良いどこか未踏の山に登ってみたい。願わくば三高寮歌にある崑崙のどこかの嶺にと。岩瀬も、実は同じことを考えています。歳のこと、体力のこと、特に胃が半分ないことを考えると、もう氷や岩のゴリゴリした山は無理だ。だけど中国の西の方にはまだ我々の力でいける山があるのと違いますかと。

この往復の車の中では山岳部時代に戻ったような気分になり盛り上がった。崑崙へのファーストステップとして前から目をつけていたカムチャッカの最高峰クリチエフスカヤに行こうということになった。帰宅後すぐにクリチエフスカヤの資料を持っている京都山岳会の朝倉さんと連絡をとった。彼女はかつて私と南米のチンボラソ、シャトルのマウントレーニアと一緒に登った女傑である。

このとき彼女から、マウントレーニアの

登攀隊長であった須藤さんが数日前にラカポシの偵察中に落石で亡くなったという悲報を聞くと同時に、レーニアと一緒に登った田中昌チンが一昨日、崑崙の六千五百メートルの未踏峰に登頂したと言う朗報を聞いた。

この朗報は、岩瀬と私に崑崙をぐつと身近なものにしたことは間違いない。昌チンには悪いが資料送付時、次のようなことを書いて岩瀬を刺激した。即ち、マウントレーニアに備えての富士山トレッキング時、昌チンはばてばてにばててマウントレーニア登頂が思いやられるほどだった。ところが彼は捲土重来、一年後には六千五百メートルのサミッターになった。岩瀬と年齢は一つしか違わないのにと。

そのとき以降岩瀬の崑崙計画への快進撃が始まった。

この年（二〇〇〇年）十一月、AACK 関東会の有志が一杯呑みに松浦コッテさんの家を集まった。席上岩瀬はクリチエフスカヤの資料を回覧して同行の志を募った。年末には旅行業者を呼んで計画を具体化し、さらに台湾の玉山登山、富士山トレッキングなどをカムチャッカ遠征前に実行することを決めてしまった。このあたりひたすら突き進む岩瀬の面目躍如たるものがあつた。もちろん崑崙遠征を念頭においてのことである。

年が明けて二〇〇一年、AACK 関東会の新年会の場で崑崙計画に強力な仲間が加

わつた。

今回の大菩薩の同行者である前田オヤマである。さらに五月の連休、越後駒に登った際、銀山湖にある学習院WVの蛇子沢小屋で一緒になった阿仁屋アンネに声をかけたところおおいに興味を示してきた。以降この四人（岩瀬、前田、阿仁屋、伊藤）に岩瀬令夫人を加えて崑崙計画打ち合わせが繰り返された。

岩瀬は五月のAACK総会で田中昌チンに会い、彼からいろいろ情報を聞き、しかも資料を仕込んで帰京してきた。計画が具体化していくにつれ岩瀬と私の間で実施時期について大きな隔たりが出てきた。岩瀬は一九九九年十月に、定年を一年前にして新日鉄を退職して時間的余裕は十分あったため、計画の実行は二〇〇二年と考えていた。一方私はまだ会社を辞めるわけにいかず実行は二〇〇三年先と考えていた。このため岩瀬ペースで計画をどんどん進めてくれと言っていた。

玉山は七月初めに、カムチャッカは七月末から十五日間にわたって実行された。これら外地登山を岩瀬はあくまでも崑崙遠征のワンステップと考えていた。カムチャッカから帰国後まもなく、九月十六日から十月六日まで崑崙に偵察に行く旨突然電話があつた。しかしこの計画は九月十一日の例のテロ事件で頓挫した。これで彼の行動もペースダウンかと思われたが、十月十九日～三十一日にかけて、彼は単身でウルムチ

から天山を超えコルラへさらにタクラマカン砂漠を縦断して民豊から叶亦克まで偵察してきたのは驚いた。

十一月九日、岩瀬が買って来た羊の肉と干しぶどうをかじりながら、令夫人も含めフルメンバーが新日鉄の倶楽部に集まり彼のビッドな報告を、それこそ血沸き肉躍らせながら聞いた。初めての地で、現地のキーマンを的確に絞込んで情報を聴取し、ローカルの山岳会で資料を探し、車でタクラマカン砂漠を縦断し、我々の目指す崑崙にできる限り近づいた行動力には舌を巻いた。しかも対象の山まで三つに絞り込んできたのである。

しかし三つのうち二つはコングルターグ山脈にありオミットされた。我々はあくまで崑崙に拘ったのである。かくして決まったのがウズターグ(六二五四メートル)であった。ルートは、北方からは急峻でホープレス、南面からの遠いアプローチを採ることとした。途中まで早大のチョンムスターグのキャラバンルートにてロバによる輸送となる。

アンネのバタゴニア行きで検討会は年内は中断され、今年に入ってAACR新年会で再開した。二月五日、日本山岳会会議室で打ち合わせの後コッテさんのお宅にお邪魔して今後の予定を決めて散会となった。私は義兄の葬儀があり参加できなかったので翌二月六日、冒頭の岩瀬からのTEL/FAXとなったのである。

岩瀬の予定表では七月十日出国し八月二十日までの四十日間の計画である。キャントカイから七日間のキャラバンの後ガントルック湖でBC設営(約四七〇〇メートル)、登山活動に十二日間を予定している。

目標の山の姿も見ず短兵急ではないかとの私の問いに、無理をせず行けるところまで行き登れたら頂上まで行きますと言うのが彼との最後の会話となった。

一昨年の天狗・金山登山を契機に一気に燃え上がった崑崙計画は、全く思いもかけぬキーマン岩瀬の急逝という大きな事情変更により直面してしまった。これからどうするのか。阿仁屋、前田の二人で岩瀬の意志を継いで今夏やるのか。

私自身は、勤務の関係で数年後になるが、この計画は岩瀬の遺志を継いで何とか実現したい。

その時は岩瀬よ、一緒に登ろうな。

合掌

川を走る

走遊会七年の記録

岩瀬 時郎(経 一九六〇)

昨年(一九八三)春のことである。いつものように仕事を終え、会社の同じ部の若い仲間と皇居の回りを走った後、ビールを

酌みながら雑談をしていた。話はいつか多摩川を走ろうということになり、六月から数回にわけ河口から日原まで走り、雲取山に登った。

これに自信をもち、今年は利根川をやるということになった。しかし多摩川とは違い、この坂東太郎利根川は日本一の大河である。長さは三百キロメートルを超え、流域面積は日本最大である。そう簡単にはいくまい。しかしながら、その風格は雄大で男らしいうえ、日頃の生活とも密着した親しみのある川である。早速全体図や詳細図を購入し、研究を始めた。特に建設省の方々には、地図や航空写真をお借りしたり、走路に関するアドバイスをいただくなど、大変お世話になった。誌面を借りて御礼を述べたい。

下流付近は温暖で古くから人が住みつき、貝塚が沢山ある。また平将門をまつた将門神社、石橋山の戦いに敗れこの地に逃れてきた源頼朝が自ら植えたという松も近くにある。江戸時代には銚子から舟で廻り、栄橋のあたりから松戸経由で江戸まで魚を運んだという鮮魚街道の名が残り、史実にはこと欠かない。明治以降、中流部には利根の水を利用した発電所ができ工場が栄えた。また源流部では、大昔海であったのだろう。貝の化石がみつかるという。

この利根川河口の銚子から矢木沢ダムまで走り、さらにダム上流の源流を廻り、大水上山まで、実際にこの足でトレースする

ことになった。

三月三十一日(一九八四)の朝、銚子の「千人塚」をスタート。銚子沖は黒潮と親潮がぶつつかうえ、利根川が流れ込むため潮流が不安定である。昔は漁船など多くの船が難破し、遭難者を祭ったのが、この千人塚という。この日の参加者は十五名。車三台に分乗しつつ、メンバーの力に合わせ一回の走行距離や登坂回数を決め、リレーしながら廻ぼうという計画だ。

銚子港 魚の市場で走り初め

銚子の街は魚市場が多く、活きのよい魚が店頭に並ぶ。昨晚銚子に泊まった者はうまいさしみに舌づつみをうち、のみ過ぎないようセーブするのに苦労したという。また、車には、今日の打上げのとき食べる魚が積み込まれている。利根川もこの付近はゆつくりと流れ、草は萌え始めたばかりで枯れた葎が東風になびいている。

大利根を左手に見て ゆつくりと

ゆつくり走る 春の休日

この日は、河口から約六十キロメートルの常総大橋まで到達した。

二回目は五月十二日に実施。前回の常総大橋から、六号線が利根川を渡る大利根橋までの約三十キロメートルは、利根町や竜ヶ崎に住む地元グループ三名でつなぐ。彼らは数年前の小貝川の氾濫に脅やかされている。また、休日のトレーニングコースも堤防を利用するなど、利根川には誰よりも愛着を抱いているのだ。常磐線天王台駅に

集合した本隊は、地元グループの力走を受けひたすら駆け上る。この付近は河川敷のゴルフ場が多い。利根運河を渡り、堤防の途絶えているあたりで一才道に迷ったりしたが、あとは快調に廻る。途中分流する江戸川を避け、茨城県側に渡るが、栗橋のところでまた右岸に戻る。地元グループの早朝の頑張りも効いて、本日は一〇・五キロメートルを走行し、ゴールの羽生市の昭和橋に着いたときはフラフラであった。

この利根川プロジェクトは、月一回の実施を原則としてきたが、当初より熱心な名誉会長(当部の部長)の仕事の都合がつかず、六月は急遽、利根川の分流の江戸川を走ることとし、本流の廻行は七月に延期することとした。江戸川も走ってみて分かったのだが、総武線や常磐線の車窓から見えるイメージとは異なり、矢切の渡しなど、のどかな風景が広がっていた。

三回目は、暑さも厳しくなり始めた七月十四日。この日は昭和橋からである。張り切っているわが名誉会長は、第一区を走り終え、第二区のランナー到着を待つ間、一寸グライダーを見てくると先に行つたまま、予定外の三区も走り切ってしまった。この辺りまでは河原も広く、ちょうどグライダーの練習場になっていたのである。堤防上を快適に走れたのも、昭和橋からおおよそ三十六キロメートル(河口より約一八六キロメートル)の五料橋のあたりまで。これから先は川からなるべく離れないようにしながら、

車道を走らねばならない。赤城山を東に、西に榛名を眺めつつといえど快適そうであるが、昼過ぎには気温もかなり上がってきた。ロス・オリンピックのマラソンもこのように厳しい暑さの中を走るのがかと思いつつ、十五時五十分やつと終着の大正橋(渋川)に到着する。

八月は利根川源流の山々の中で、比較的簡単に登れる巻機山へ出かけた。山登りをしたことのない者が大半であったが、日頃の鍛練のせいか猛暑にもめげず、山頂近くにテントを張り、酒を酌み交わし残る区間の健闘を祝した。夏休みでもあり子供達も参加し、にぎやかな山行であった。

ジョギング最終区は九月十五、十六日の両日に実施した。もう日帰りができないところまで来てしまったのだ。河の様相もいつしか変り、広い河原を瀬となって流れている。ここまでは橋が中継点として良い目印であった。距離も適当で、ほとんどが五十キロメートルの間隔であった。しかし今回のスタート地点大正橋を最後に、中継点は、上越線の各駅となる。本プロジェクト開始以来初めての雨となったが、ほてる体に心地よい。水上を過ぎ、湯檜曾への流れを分けると、利根川もぐつと細くなり、もう下流の面影はない。と同時に、藤原ダムへの急な登りが始まる。

トンネルを走り抜けると利根の秋

藤原湖のあたりは、秋の気配が漂いはじめている。須田貝ダム入口まで走り、この

夜は藤原湖に近い民宿で泊った。

ジョギング終点の矢木沢ダムまでは、あと十キロメートル。翌朝、小雨の残る中を全員で目的地向かう。洞元湖沿いの道をゆつたりと走っていると、谷間のかたに城壁のようにそびえたつダムが見えてきた。ダム上部の急坂をあえぎ登ると、そこが終着点。とうとう着いた。銚子からの三百キロメートル走ってきたのだ。ダムの水量は非常に少なく(満水時水面より二十〜三十メートル下)、茶色い地肌が湖面の周囲をとりまいていた。この奥は厳しい山登りの世界となり、全員でやれるのはここまでだ。帰途宝川温泉に寄り、それぞれゆつくりと感激を味わった。

秋雨の 利根駆け上り 露天風呂

来し方をふりかえりつつ、ゆつくりと汗を流す。銚子からの道程の何と長かったとか。夏草のむせかえるような土手の上、犬に吠えられたこと、雨の中の急登……。今にして思うと、あつという間に終わってしまったような気もする。

わが走遊会はずぐれたランナーの集まりではない。どこにでもいる健康目的のサラリーマン・ジョガーの集まりである。平均年齢も四十歳を超えている。大会に出て自己記録は度外視、大会に参加したことのない者の方が多い。

幼き日の 遠足でみた夢!

若き日の 自分の足で走った実感!

若い日の 胸に残る思い出!

体調をくずし後半戦線を離れていった者、半分しか参加できなかった者、いろいろなメンバーがいたけれど、全員協力しあい、無事三百キロメートルを完走しえたことは、参加者の胸にいつまでも思い出として残ることであろう。

さて、残るはダムから上の源流部である。調べてみると滝あり、淵あり、ゴルジュありで、特にスノーブリッジが悪く、相当の困難が予想される。渇水期でスノーブリッジも通過しやすく、気温もあまり低くならない九月下旬に決行することとした。メンバーは登山経験をもつ会員二名とその友人の三名で、いずれも過去日本有数の岩壁を攀じのぼったり、海外の山を経験した者ばかりである。が、いかんせん、みな四十代の熟年パーティーである。

水資源開発公団のご好意により、ポートでダムを遡り、いよいよ出発である。ダムの水量が少なく、あまり上流までは行けないだろうとのこと。かつてあった湖岸の道は今や完全に荒れており、歩けば一日仕事である。ポートは湖面を滑るように走り、わずか三十分たらずで赤倉沢、割沢間の対岸に上陸。さあ、遡行開始だ。天気は良く、膝下程度の渡渉が心地よい。「はや」だろうか、二十〜三十センチの魚の群れが足下を矢のように走る。一日目は淵を二つ通過した程度で大した難所もなく、三時過ぎ越後沢出合でテントを張る。

翌朝、ヒトマタギといわれている所を通

過。文字どおり一跨ぎできる川幅で、股下を奔流がほとばしる。下流ではゆつたりと大河の風格をもつて流れていたことを思うと感無量である。最難関といわれるオイックイにやってきた。兩岸は切りたち、谷はスノーブリッジで埋まっている。長いものは百〜二百メートルもあるうか、中は真つ暗である。特に出入口付近は雪渓が薄く崩壊しているところもあり、この上なく気持ちが悪く、走るようにして通り抜ける。オイックイをぬけても、淵、滝、草つき……と悪場は続く。高捲きの途中、動物の白骨死体があった。カモシカであろうか、頭部がないので定かではない。きつと雪崩にまきこまれたのであろう。

午後、黒雲が湧き、とうとう雨が降り始めた。濡れるのは構わないが、増水がいやだ。渡渉できるところも通れなくなり、おそろしく時間がかかるからだ。幸い夕食時には雨もあがり、星が見えてきた。水量には影響なさそうである。

谷はどんどん急になり、滝また滝が続く。直登したり、高捲いたり、一步一步慎重に進む。軽い怪我、例え捻挫でもこのような谷の中で歩けなくなったら大変だ。ザイルを頻繁に使う。それとともに、昔の岩登りのカンも次第にもどってくるが、悪場の連続で予想外に時間をくう。毎朝暗いうちに起き、六時前後には歩き出しているのだが、今日も稜線には出られなかった。谷の中で三度目の夜を迎える。さすが利根川は手強

く、容易には登らせてくれない。

四日目、水量は少なくなり、昨晚のテント地付近で川幅は二メートル程度、どこでも渡渉できる。もう稜線も近い。大きな滝を二つ三つ越えようと、いよいよ水源も近くチョロチョロとした流れになる。

最後の水場で水筒に水を汲む。帰ってから利根川を走った仲間達と水割りにして飲むためだ。十時前やつと大水上山に着く。

思えば、長い長い道程だった。

そもそも、この利根川があるというのに水が不足するなんて、そしてこんな大きな川が汚れるなんて、一体どうなっているんだろ。首都圏の水がめはこの利根川だけではない。また、川自身はかなり強力な自浄作用をもっているという。それを活かすに超えるほど水を使い、川を汚しているのだ。

川が氾濫し、家屋、田畑が水につかっってしまう。だが扇状地、平野というところは、もともと川の流れるところなのだ。川によってつくられたものなのだ。それを川は堤防の内側だけを流れるべきだとは、随分人間も勝手である。

人間が水を使い過ぎる。川を汚す、川の流れるところに勝手に家を建てる。人すべて人間が悪い。いや、そうではない。個々の人間が悪いのではない。人間が多過ぎるのだ。首都圏が膨大になり過ぎてきているのだ。水不足、河川の汚染。氾濫の危機、これらに対抗して堤防をつくり、上流にダムをいくつもつくる。それでも水は不足し、川は

汚れ、また氾濫の可能性はきえない。人間の知恵が、努力がまだ足りない。否、そもそも人間が完全に川を治めるなんて、不可能だ……。

ふと気がつくと、大水上山の上から遡ってきたはるか彼方を眺めながら、そんなことを考えていた。あまりにも素晴らしい大自然にのまれて、とりとめのないことが頭をかすめたのかも知れない。

さあ、下山だ。谷の中で三泊もしたため、今日中に帰らなければならぬ。ザックを背負うと、さつき汲んだ水が水筒の中で「チャポン」となった。

新日鉄社内誌 『走遊会』(一九八九・十二)より転載

(初載 建設省省内誌『河川』No. 四六一(一九八四・十二))

〔符録〕

利根川完全踏破(銚子↷大水上山) / 大水上山頂に埋められた記録

第一区 一九八四年三月三十一日 銚子↷滑川(六十・五キロメートル) 岩瀬他会社

社上司同僚十四名

第二区 一九八四年五月十二日 滑川↷羽生(百・五キロメートル) 岩瀬他会社 上司同僚十一名

第三区 一九八四年七月十四日 羽生↷渋川(七十・五キロメートル) 岩瀬他会社 上司同僚九名

第四区 一九八四年九月二十五↷二十六日

渋川↷矢木沢ダム(六十六・九キロメートル) 岩瀬他会社上司同僚九名

源頭(本流遡行) 一九八四年九月二十一↷二十四 矢木沢↷大水上山 岩瀬、伊藤寿男(AACK、特別参加)、他会社同僚一名

岩瀬時郎氏 略記録(調査不完全により、漏れがある可能性が大きい)

〔現役時代〕

一九六〇 / 京大山岳部入部

一九六二 / インドラサン(六二二メートル) 遠征隊員

一九六四 / 京大経済学部卒業、八幡製鉄KR入社、光工場赴任、同工場山岳部で活躍、東京勤務

一九七五 / この頃より家族で登山をはじめ

一九八四 / 利根川の河口(銚子)から源流の大水上山(頂)まで、走り登る(本文参照)

一九八五 / キナバル(四一〇一メートル) 登山

一九九五 / ガン手術

一九九五↷二〇〇〇 / 千葉県の諸々の山、群馬県の諸々の山を踏破

(AACKニュース・レター#十五、一月号、同#十六、四月号に『山岳研究』として掲載)

二〇〇一 / 七月、台湾の玉山遠征
二〇〇一 / 八月、カムチャッカのクリフエ

スチカヤ遠征

二〇〇一／十月、コンロン単独偵察
二〇〇二／二月急逝

「映像史ヒマラヤへの道」 批判にコメント

平井 二正 (工・電気 一九五四)

いろいろな意見にいちいち反論することもないと思うが、ニュースレター二十三号で山口、北村からご指摘をいただいた点につき、誤解もあるようなので製作責任者としてコメントする。書いているといいわけじみてきて空しさを感じるが、誤解だけとはっておきたい。

一. 構成案

一九九九年総会でA A C K七十周年記念事業のひとつとして映像史をつくることになり、私とその責任者になった。だからすべての批判は私を受けるが、構成案については私ひとりで決定したのではない。すくなくとも二回、(二〇〇〇年十一月、二〇〇一年四月)、会長はじめ関係者に集まってもらって、映像作成に関するコンセプト、内容、構成案などを検討した。これに基づいて構成案は製作にあたる関西シネセルの

松本正樹さん(探検部OB)に原案を作ってもらった。もちろんその前に、非公式に何度も打ち合わせは行っている。コンセプトについてはニュースレター二十二号に報告したが、このコンセプトが基本になって作られた。

「構成案はA A C Kのことをしらない外部の人にまざるなげしたのではないか」(北村)、という批判は、当事者、委員会に対して失礼である。

詳細は省略するが、二〇〇一年九月、映像のラッシュを会長はじめ委員などでみて修正意見を出し、十月六日の今西シンポジウムではじめて公開した。

二. 内部資料かどうか

「版權の問題もあるので、外部には頒布しない」、というのが外部には出さないという誤解を生んだようだ。日本の登山と探検の歴史を語る上で貴重な資料になるということをおぼえれば、J A C など関係機関、関係者には配布しておくべきで、外部に出さないということは毛頭考えていなかった。

山口のいう各遠征隊のプロモーターやA A C Kの功労者などは映像の流れからも盛り込むのはむづかしい。それぞれの立場で見が百出することは製作前から想像されていた。限られた時間内ですべての意見をとられることは無理である。委員会でも裏面史のようなことはもろこまない、そういう話は別になんらかの形で作ったらという

意見があつた。外部の人にもみてもらうという立場であるので、たとえば梅里雪山を中国語で発音しなかったり、A A C Kをドイツ語よみにしなかったりしたのである。

三. ヤルンカンやメイリーの取り扱い

ヤルンカンとメイリーの取り扱いが軽いという批判があるが、これは人によって意見のわかれるところである。外部の人の目に触れることもあることを考えて全体バランスからああいふ形にした。遭難事故をどう考えるかにもよる。

山口が編集したメイリーの映像は、プロが見て構成上入れられないという判断をした結果である。そのほか時間制約や画質のためにカットした映像が多かったことを付記する。

四. おわりに

北村のいう内部資料的なものをもう一つ作ったらという意見であるが、なにもビデオにする必要はない。委員会では、別冊のようなものを作ったらどうかという意見が出た。たしかに鈴木信さんや工楽英司さんの話などはどこかに記録しておいた方がいいと思う。まず提案者がニュースレターに書くことを希望する。

編集後記

● 本AACK副会長の一人、岩瀬時郎氏が急逝された。本号の前田栄三氏の文に詳しい。同氏のご冥福をお祈りしよう。

少々旧聞に属すが、岩瀬氏が、かつて勤務先の社内誌『走遊会』に投稿された文『川を走る』走遊会七年の記録』（一九八九）を再録する。同氏が一九八四年に実行した、大利根川の河口、銚子から源流の山頂大水上山まで、走り継いでかけあがるというものである。源流の麓までの約三百キロメートルを四回で走り継いで、最期のコースは山登りとなる。AACK会員で親しい友人の伊藤寿男氏とともに、この最期のコースを完歩完走した。岩瀬氏の生きざまがよくわかるというものである。また、近々、数名の有志とコンロン遠征の計画があったという。岩瀬氏が急逝して、この計画は頓挫したかと思われたが、そう結論するのはまだ早いと叱られた。この計画が無事に成功することを祈ろう。

● 本来の予定では、臨時特集として『内外の山行紀行文の臨時特集』を予定していたが、急遽、岩瀬時郎氏追悼文とさし替えた。山行の紀行文は、次の八月号に予定している。

八月号には、ケニア、カムチャッカ、東ネパールアルン河流域、グリーンランド、南アルプスを予定している。この他に山行記録のある人は投稿をお願いする。八月号

の締め切りは六月十五日ころ。ワープロの横書きでメールして戴くと一番手間がからない。

● AACKのゆく道を『常設特集』とすることは勿論である。これは本年十一月号をピークとして、除々に既掲載の論文の批判質問文に移るので、『AACKのゆく道』について意見のある人は、次号八月、次月号十一月に投稿していただきたい。

● 先月号に、平井氏のビデオについて、山口氏と北村の批判文が掲載された。本号には、それに対する平井一正氏の反論を載せる。反論の反論もそれぞれにあらうが今回は載せない。

● だが「特集 AACKの行く道 Aシリーズ」は違う。反論の反論も載せる。その反論もまた載せる。質問も著者の解答と共に掲載する。今号でA1からA11まで十一論文が載ったが、それらに対する批判・反論、著者に対する質問などを歓迎する。申し出により、匿名でもよい。（北村）

編集委員 北村泰一、上田 豊、松林公藏

発行日 二〇〇二年二月二〇日

発行所 京都大学学芸部

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 氣付

製作 京都市北区小山西花池町一一八

(株) 土倉事務所